

「ソドムの滅亡とロトの娘たち」

2021年01月15日

主は、ソドムとゴモラの上に、主のもとから、すなわち天から硫黄と火を降らせ、これらの町と低地一帯、町の住民すべてと、土地に芽生えるものを滅ぼされた。ロトの妻は振り向いたので、塩の柱になった。(創世記 19 章 24 節から 26 節 a) 姉は男の子を産み、その子をモアブと名付けた。彼は今日のモアブ人の先祖である。妹もまた男の子を産み、その子をベン・アミと名付けた。彼は今日のアンモン人の先祖である。(創世記 19 章 37 節～38 節)

ロト一家は、日が昇った頃、ツォアルの町にやっとの思いで逃れ着いた。すると神は、ソドムとゴモラの上に、天から硫黄と火を降らせ、町と低地一帯、町の住民全てと、土地に芽生えている草木を滅ぼされた。ソドムとゴモラは、神の裁きによって焼き尽くされたのである。ソドムは神に滅ぼされた町として、代々に語り継がれている。主イエスは、悔い改めないカファルナウムに対して、「しかし、言うておく。裁きの日には、お前よりもソドムの地のほうがまだ軽い罰で済む」と語っておられる。

滅亡から逃れていく時、み使いは「振り返ってはならない、立ち止まってはならない」と言われた。しかし、ロトの妻は振り返り、彼女は塩の柱になった。彼女はどのように振り返ったのか。ソドムに残した諸々の財産への執着があったからではないか。ソドムで良い交わりを持った、愛する人々への思いが、振り返させたという言う人もいる。死海のほとりには「塩の柱になったロトの妻」の姿に似た岩塩がある。御使いの言葉に従わず、豊かに暮らした過去への愛着で振り返った罪の姿として、観光客に見られている訳である。

アブラハムは翌朝早く起きて、主の前で、ソドムを見下ろした場所に行った。ソドム、ゴモラ、及び低地一帯を見下ろすと、地から煙が、まるでかまどの煙のように立ち上っていた。かつては、エデンの園のように潤い、豊かであったが、見る影もなく、滅ぼされた。新約聖書は、罪人を赦す主イエスの福音が中心メッセージであるが、旧約聖書は、神の意思に反する罪は、厳しく裁かれると告げている。その中で、神はアブラハムへの祝福を忘れず、ロト一家を、深い愛と配慮を持って救い出されたと伝えている。

ロト一家はツォアルに逃れたが、この地に住むのを恐れ、山地の洞窟に住んだ。ある時、姉は妹に、父は年を取ってきたし、私たちの所に来てくれるような男はいない、父にぶどう酒を飲ませ、一緒に寝て、父の子孫を残しましょうと言った。その夜、彼女は父にぶどう酒を飲ませ、父のところに入って、一緒に寝た。そのことをロトは全く知らなかった。次の日、姉は妹に、タベ父と寝たように、あなたも父のところに入って寝なさいと勧めた。妹も、姉の勧めに従って、ぶどう酒を飲ませた父と寝たが、ロトは全く知らなかった。二人の娘は父によって身ごもった。「姉は男の子を産み、その子をモアブと名付けた。彼は今日のモアブ人の先祖である。妹もまた男の子を産み、その子をベン・アミと名付けた。彼は今日のアンモン人の先祖である。」考えられない二人の娘たちの行動は事実とは思えない。この記述は、モアブ人とアンモン人は近親相姦による民族だと言っている訳である。これらの民族はイスラエル人と常に敵対関係にあった。近親相姦によって生まれた民族であるということによって、著しく侮蔑したのである。他民族を蔑む時は、その出自の醜さを述べるのが最も有効である。聖書の著者たちも、神の公正を問いつつも、偏狭な民族主義者であったことの証左ではないか。